

続・後日談 -祝福のためのモラトリアム-

2月、スウェーデンの凍った湖の上を歩きながら、私は日本に住むある友だちのことを思い出していた。彼はサーミ族に詳しく、私はスウェーデンを訪れると、次に会ったときの話題を無意識に探していた。

ブリュッセルに戻り、どんよりした冬にうんざりしながら春を待ち侘びていた2月末日、彼の訃報を受ける。既に火葬も済んでいるのだという。

身体硬直、膝から崩れ落ち、散々に虚無り、一頻り考え事をして、寂しさで吐きそう。

涙を流れるままに流し少し寝て起きて多動。

衝動的にまだ肌寒い庭に出て、再び節操なく溢れる涙を放置しながら土を耕し、家にあった花の種を撒きちらした。

奇行の最中思い出していたのは1年半ほど前のある情景。

夏、カフェのテラス席、白ワインと炭酸水で割ったカクテル、頭上の大きな木から漏れる光。

亡くなった友人について話す知人。

いろいろ言った後で、その人は最後にこう締めた。

もう会えないのは寂しいけど、自分はその友人の人生を祝福したいと思う、と。

「人生を祝福する」という概念は当時の私の中にはなく大きな衝撃だった。感動した。

私とその文言を使う機会は無かったけれど、脳のメモリの奥にそっと大切にしまいこんでいた。

それが突然呼び起こされ解凍され私の身体にゆっくり染み、反応が起きてその結果庭に飛び出した。のだと思う。

きっと私は、その素敵な知人のように、死んでしまった友だちの人生を祝福したかった。

のだが、私はあまりに未熟で、他人の人生を祝福するというのがどういうことなのかわからない。

そんな、文言との断絶を少しでも埋めたくて、ひとまずの弔いとしてたまたま家にあった花の種を撒いた。

祝福という言葉と花の持つイメージが結びついたのでと思う。

種を蒔くというのは、時間稼ぎなのかもしれないな。

彼の死について、いろんな「私の」思いがあるはずなのに、それらは油断すると凡庸な言葉に集約されて、出来事として収束してしまいそうになり、それにどう抗えばいいのかわからない。

凡庸な語彙というのは汎用性の高さゆえ伝播して生き残っていったのだろう、そして私たちの生っぽい気持ちや思考はどうしても、そんな強い語彙に乗っ取られてしまう定めなのかもしれない。嫌だ。

そんな時、ふと起き上がってきた前述の文言「人生の祝福」に希望を見出した。

が、まだ私には分不相応な気がした。

そもそも、知人がそこに込めた思いと、いま私が抱える思いは同じではない。文脈も異なる。

それでもこの文言を借用し、これを媒介に今回の出来事を受け止めたい。

たとえ完璧に運用できなくても、たとえほんのり誤用であったとしても、使っているうちに自分に馴染み、いつかその文言にふさわしい自分になれる気がする。

語彙を選び取るということは、自分がこの世界の出来事をどのように捉えたいのか、その方向を指し示す祈りのようなものなのかもしれない。

この文言に私自身が追いつけるまで、花が咲く日までの時間を隠れ蓑にして、沈黙の中で祝福の準備を進めることにした。

いつまでも混沌とした喪失感を抱え続けることも尊いのだろう。

しかし生きている私には生活がある。

友だちの死すら自分の物語の養分として消費しているかのような自己嫌悪は否めないが、人は物語化によって出来事に意味を見出そうとする。

他のあらゆる出来事と同様、死そのものに意味があるとは考え難い。

しかし喪失をただの喪失として抱え続けるには、私は弱すぎる。

こうして人は物語に見苦しくすがってしまうのかもしれない。少なくとも今、私はそれを許容せざるを得ない。

そのとき倫理はどこにあるのか。

それは語りの作法の中にあると仮定してみた。

語りとは、出来事を自分の持っている語彙で編み直し、そこから何かを得ようともがく行為である。

そうして生まれた物語の力で、ままならない現実折り合いをつけているのかもしれない。

もし私たちが物語化から逃れられないのだとしたら、人生を通して納得のいく語りを丁寧に積み上げ、自分の思想に沿った運用を訓練し、こうして語彙の倫理と美学を磨き上げていく態度が、物語とのより良い関係構築に必要なのでは…？

などと悶々と考えながら、彼に手向ける花が咲くのを待つ日々です。